湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ

大学名　:湘南医療大学保健医療学部
所　属　:リハビリテーション学科　理学療法学専攻
名　前　:鶴見隆正
作成日　:2026.4.27

1. 教育の責任

リハビリテーション学科は、理学療法学専攻と作業療法学専攻の両専攻を統合する学科として本学保健医療学部の1学科に位置づけられている。私は、開学以来リハビリテーション学科の学科長として両専攻の学生教育、研究活動、地域貢献はじめとするリハ学科運営を円滑かつ本学の中長期目標を達成すべき任にあると認識し、本学の学生教育並びに大学の発展・運営にかかわってきた。理学療法士、作業療法士を目指すために本学を選び、入学した若い彼らとその保護者の方々に対して、本学の教育理念である「人を尊び、命を尊び、個を敬愛する」を基盤とした「高度な専門知識と技術の教育」「質の高いチーム医療」「地域医療の教育」を 4 年間で確実に教授し、全学生が所期の目的である国家資格取得100%を達成することである。すなわち本学科のディプロマ・ポリシーを満たした学生を輩出できるように、学科全体の教育ベクトルを高め導くことが責務であると考えている。

私の主たる担当科目は、入学したばかりの初学生に「リハビリテーションとは」を教授するリハビリテーション概論（1年前期）、理学療法教養基礎（1年前期）や義肢装具学Ⅰ（2年後期）のほか、地域理学療法学演習（2年後期）、運動器系理学療法学演習（2年後期）、理学療法研究法演習、卒業研究、臨床実習などをオムニバスにて担当しているほか薬学部医療薬学科の3年生後期に総合リハビリテーション論の必修科目を担当している。

2026 年 4 月からリハビリテーション学科理学療法学専攻の入学定員が 40 名から 60 名の 50%増員が認可され、3 ポリシーに則ったよりきめ細かな教育と学生指導が求められ、これに応えていく。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

障害のある人や疾病などにより日常生活が制約されている人々に寄り添い、彼らの全人的復権を目指すリハビリテーションにおいて、私は「情熱と創意」を核心に据えたアプローチが重要であると常に考え、臨床活動や教育に取り組んできた。「情熱と創意」を基盤としたアクションが私自身の理学療法士としての臨床活動の原点であり、引いては理学療法士、作業療法士を目指す若き学生たちへのリハビリテーション教育する際の基盤となっている。

生命の危機や疼痛に耐えつつ、外科的治療やリハビリテーション医療などをひた向きに取り組み、一日も早い快復と社会復帰を目指す患者・家族に対する理学療法・作業療法は、常に最適で最新の根拠のあるアプローチが求められている。それだけに理学療法士・作業療法士には、日々の臨床活動や教育活動や社会貢献を果たすために情熱をもって対象者に寄り添い、創意工夫した柔軟な取り組みが重要と考えている。このような地

道でひた向きなアプローチを重ねることで、彼らの将来の道が拓かれ、社会復帰が可能となると信じている。したがって私自身のこれまでの「来し方」を基盤にした想い、考え方、治療技術などを織り交ぜ、次の時代を担う学生に伝道することを教育のコアとしている。

2)　理念をもつに至った背景

理学療法士として 2 つの大学病院での 24 年間の臨床活動を通しての学びが私の理学療法マインドの原点となっている。例えば担当した超低体重児の NICU 、運動発達遅滞児や脳性麻痺児らの早期リハビリテーションを通して、児を抱える母子への長期的支援のほかに、児の統合保育や小学校への就学支援などの社会医学的な理学療法体験は得難いものだと認識している。また ICU はじめとする急性期から終末期医療を通して自分なりの生命倫理観や病める人への医療人の有りかた、そして入院期間や転院支援を通しての医療制度の課題や矛盾、さらに職場復帰や就労支援では「医療の枠から飛び出す」必要性を痛感するなどの心理社会医学的な観点の気づきは自身の理学療法マインドの形成に大きく影響したと考えている。このように自分の「来し方」を基盤に、臨床現場における事例カンファレンスからの学び、関連学会や関連書籍等からの多面的な学びや刺激が少なからず学生教育の原点となっている。

したがって学生教育場面では、これまでの臨床体験や最新の理学療法を包括した医学的知見を織り交ぜながら、臨床の奥深さと課題等を伝えるように努めている。

3　教育の方法・戦略

リハビリテーション領域の両翼を担う理学療法、作業療法について、医学的、社会心理学的な学修を深め、向学心を高めるには、大学入学時の初学生に如何に系統立った有効な教育方略に則った教育展開にするかがポイントである。障害や疾病を有する対象者の医学的な治療アプローチのみでなく、彼らの人生の再構築、社会参加などの課題等についても初学生に分かりやすく説き、自律的に学修する契機をファシリテーションすることが教員に求められている。

それには統合的カリキュラムが重要であり、人体の仕組みと機能の解剖生理学、臨床運動学などのリハビリテーション医学の基礎知識、医療と地域社会生活を取り巻く関連性、IADL を高めるアプローチ技法の修得など、これらの各要素を相互関連付けて学修することがポイントとなる。具体的には、

・模擬事例学習や早期臨床体験実習では、多様な事象や事例を観察したり問題点を抽出する中で、学生は臨床現場での医療人としての態度、コミュニケーションの重要性を認識し、社会復帰プロセスや自宅生活復帰の課題等を見出すことにつながり、リハビリテーション医療の奥深さを知る契機となる。

・リハビリテーション概論では、初学生がノーマライゼーションを思考する方法として障害児の

就学問題に直面している模擬事例の提示、また障害者の復職課題については、壮年の CVA 模擬事例を提示し、社会医学的観点でのアクティブラーニング的に検討を促し、代表者に発表させ意見交換をファシリテーションし、ノーマライゼーション思想の歴史と経緯についても解説している。同様に障害者の復職や就労課題については模擬事例を通した障害者雇用促進法との関連性を含め、支援には多職種連携の重要性について説いている。

・義肢学では、大腿部切断を余儀なくされた中学生の模擬事例を提示し、切断のリハビリテーション過程を軸に各種ソケットや膝継手などの特性を説明し、義肢を身近に感じるように取り組んでいる。また切断事例の義肢装着指導から自宅復帰に向けた理学療法支援については、グループ討議を促す問題解決型学習 PBL を取り入れて、切断のリハビリテーションの学修効果を高めるように努めている。

・義足・義手には、多種多様なソケットや関節継手、足部や手先具の各種パーツがあり、それらを学生が手にした際の感触（重量感、硬度や色彩、機能など）を体験させ、僅かなアライメントの差異が歩容に及ぼす影響を体験的に学修させ、より正しい義足歩行の指導法を実技指導している。

4. 学習成果

本学では授業評価指標の一つとして「FD ネットワークつばさ」を開学以来、継続的に活用しており学期ごとに担当科目全てを対象にした授業評価を学生が記入し、そのデータは集積され、結果一覧は附属図書館にて掲示されてきた。担当している各科目の総合評定は 4.2～4.8 と概ね良好な評価を得ているが、教科評価ごとにリフレクションペーパーを提出し授業改善に努めている。上述の障害児の就学の模擬事例や壮年 CVA の復職模擬事例に関する評価コメントの中には、1 年前期では病態像やその予後についての学習が不十分、疾病と障害の関連性の理解ができていない、などのコメントが記されていた。一方、PBL やアクティブラーニングに関しては好評であり、今後も積極的に講義の中に取り入れていきたい。

第 61 回理学療法士作業療法士国家試験（2026 年 3 月発表）では、理学・作業療法学専攻とも新卒者全員合格 100％を達成した。

5. 改善のための努力

講義に際しては、初学生にも臨床感が伝わるように創意工夫を重ねてきた。病態像や随伴症状などは可能な限り視聴覚教材を随所に織り込み、また模擬事例の PBL やアクティブラーニングでは教員のファシリテーションを重視している。具体的には体験的実習や実技的指導を取り入れ、チーム医療や多職種連携の大切さを学生がプラス思考で学修できるように支援したい。

・ソケット作製やアライメント調整の実習を義肢装具製作会社と共同で実施できるようにしたい。

・リハビリテーション概論では、可能な限りリアル感のある事例を視聴覚教材として取り入れ、病態像等が伝わるように努めたい。

・模擬事例を多用して多職種連携の意義や理学療法士・作業療法士の役割を早期体験的に学修するようにしたい。

6.　今後の目標

　理学・作業療法士を目指しリハビリテーション学科に入学した学生全員を 4 年間で卒業し、且つ国家試験全員合格を果たし、学生主体の国家試験対策が定着することを第一目標としている。短期的な目標は、各年度入学生が所期の教育課程を確実に履修し学年進行ができるよう取り組んでいく。

【添付資料】

・超高齢社会を担う理学療法・士に必要な視点　「理学療法界 50 年」からの継往開来、四国理学療法士学会会誌.2015.37.16-23.（項目 1・2）

・理学療法におけるジェネラリストとスペシャリスト: 手で感じ取り、頭で解釈し、心を読み解きそしてアクション、理学療法ジャーナル.2018.52.711-715.（項目 1・2）